

東京オリンピック2020に失望することなく ポリグロットで若者の祭典、老若男女の交流を

浜田真悟（イベント学会会員）

まえがき

私は数年前にイベント学会入会を認めていただいた新人並みのイベント学入門者でございます。今回の学会2020におそらくオンラインで参加をされるであろう予定のものであります。東京、名古屋、大阪と三か所のオンライン会議併設もなされた今回の学会開催はこれまでにあまり例のない試みになるのではないかと内心期待もしております。

私は、1990年代後半の渡仏留学いらい、機会あるごとに欧州での滞在を重ねまして、ここ数年ではドイツおよびフランスでの活動を展開しております。事業としては、ソーシャルネットワークと呼ばれる人的資源の開発を土台にして、ビッグデータやシマンテックウェブ、オントロジー開発などを手掛けております。

同時に、欧州での観光資源開発に着目し、とくに欧州的なイベント資源の開発とはどのようなものか、という課題にアプローチしております。今回、日本で開催予定されていた東京オリンピックの延期、コロナ感染の状況などを踏まえて、イベント学の今後を占う、もしくは、未来のイベント学を創造するような野心を若い世代の方々にもお伝えすべく論考をしたためるものです。

ビフォーコロナ、アフターコロナ？

今回のコロナウィルス感染拡大は、2019年の中国武漢での第一報からその後あれよあれよという間に世界的な広まりを見せ、2020年後半現在、世界的な第二波が懸念される状況となっております。世界保健機構などの専門家によれば、2021年はおろか、2022-3年ぐらいまで世界的規模の流行に衰えはでないのではないかと悲観的観測まででだしております。

そうしたなかで、多くの識者の方々によって、コロナ前とコロナ後の人間社会の振る舞いが根本的に変化するだろうという、実に、人類史上のメルクマールをなすほどの変化が示唆されております。イベント学会の皆様はこの点に関して多くの知見と意見をおもちのことと存じます。

今更ながら考えてみますと、ビフォーコロナの社会経済に問題があったのか、アフターコロナで状況適応することの問題の方により意味を感じるのか、どちらがどのように正統なのか見極めがつけがたくありますが、ともかくも、コロナ感染拡大の状況が収束すればビフォーコロナの経済活動にもどればよいとする意見と、いやアフターコロナはそれでは済まないだろう、という意見があるように思えます。

ともかくもコロナは現在進行中であり、今現段階ではビフォーでもアフターでもない、という点が今回のイベントロジー考察の鍵でもあり、イベントの最たるもの、東京オリンピックをむかえてどのようにビフォーすればよいのか、どのようにアフターすればよいのかを考察してみたいと思います。

危ぶまれる東京2021

今回の東京オリンピック、Olympic Tokyo 2020 が延期され、現段階では2021年に開催できるかどうかを検討中とのことで、今年2020年の年末にはいずれにしても開催の成否は結論付けされていると思われます。さて、ここで提起したい問題は、開催の成否にかかわらず、オリンピックが若者の祭典であること、世界中のアスリート、老若男女の交流の場であることを忘れていないか、忘れないためにはどのような振る舞いをすればよいのだろうか、という点です。

東京オリンピック開催が決まってから世に提起された議論はさまざまなものがありました。8月の真夏時期に過酷な猛暑をどのように避けるのか？オリンピックボランティアは無償でよいのか？コロナ禍で開催する場合、現地観客はなしにしてリモートで開催できるのか否か？などなど。

しかし、ここに一筋の光明が見出せます。2021年コロナ禍の下で開催することになった場合、アスリートはともかくとして、観客がリモートで参加するとすれば、観客の猛暑負荷は大幅に軽減できる。ボランティアが現地で活動する数が大幅に軽減され、無償有料問題に解決を出せる可能性が出てくる。ボランティアで大きな活動が予定されている多言語話者の活動をリモートで行うことで、リモート活動の二次資源を開発できる可能性がある、などです。

それでも若者の祭典、老若男女の交流を！

さてここでは究極論として、コロナ禍のリモート利用を土台として、2021年にオリンピックが行われようが行われまいが、若者の祭典、老若男女の交流を推進するイベント学について考察してみます。

このためには、イベント学会および関係諸学会がオリンピックに並行してリモート活動を開発するスタンスを持つことが必要です。これがこの論考におけるアフター論です。そして、仮にオリンピックが開催できなくなろうとも、オルタナティブな若者の祭典と老若男女の交流の場を創造することが必要です。

この活動の鍵は、上記の中で述べた「多言語話者」もしくは「多言語活動」です。通常オリンピック開催下においては、英語・日本語以外の多言語の活用が利用とされます。かくいう私も、1998年の長野オリンピックの時には、フランス語・ドイツ語のボランティアを申し出て、その予算がフランス語の検定試験DELF・DALF（フランス国による認定試験）および、ドイツ語の検定試験ZDaF（ドイツ国による認定試験）の取得にあてられました。

さてあれから20数年たつわけですが、日本人の多言語活用度は進んでいるでしょうか、低下しているでしょうか？東京という都市が国際化の度合いをすすめているなか、あきらかに海外からは英語話者以外の多言語話者が増えているものと考えられます。

そこで、スポーツの祭典としてのオリンピックに並行して、多言語活動【資料1、4】のオリンピックを政府に働きかけてはどうでしょうか？多言語活動は、Polyglot ポリグロットと一般に呼ばれており、欧米では日常生活の中で非常になじんでいる活動です。Multi Lingual マルチリンガルという語は英語圏の学術分野では流通していますが、日常の活動にはあまり試用されません。そして、祭典や交流に

ふさわしく、スポーツの競技の点数をきそうようにやるのではなく、言葉によるゲームを作り出す事が必要です。【資料2、3】

若者の祭典にかかせないポリグロット活動

日本にはかつて80年代ごろにNHKのテレビ番組で「連想ゲーム」という番組がありました。私は当時学生で、この番組の言葉遣いの面白さに魅了されたことがあります。日本人が日本語で日本語話者とだけ交流できる言葉のゲームでした。

さてこれを世界版にできないでしょうか？オリンピックゲームの中であたえられたある言葉、あるキーワードを世界中の多言語話者に伝えてみる。連想が連想を呼び、混乱が混乱を呼ぶかもしれません。しかし、正解なんてどうでもよいのです。人と人がコミュニケーションすることこそが大事なのです。そうしたイベントを作れないでしょうか？もし、これを日本が先駆けて定式化すれば、4年に一度のオリンピックにはかならず採用されるでしょう。そしてこれがこの論考におけるビフォー論です。

さらに、オリンピックならず各種スポーツ文化イベントに並行して毎年でも日月数に制限なく実行できるのではないのでしょうか。たしかに夢にすぎるかもしれませんが、しかし、コロナ禍で苦しんでいる世界に一盞の希望の灯をつける、その先鞭を日本が担うとしたら、どんなに素敵なことでしょう。

あとがき

今回、コロナ禍で学会への現地参加が阻まれた私としては、海外からのリモートを活用するに加えてさらに、このような提案をさせていただくことと合いなりました。ポリグロット活動【資料4】がイベントロジにおけるビフォー・アフターとなるという提案です。失敗は発明の母と申します。艱難汝を玉にす、なのかもしれません。コロナ禍でさまざまな災苦を乗り越えようとされているみなさまへ、ご自愛の念とご活躍の念願をこめて、私の提案をお届けいたします。

資料

- 1) 日本発のポリグロット活動「地球のつながり方」によって、東京オリンピック2020の代替サポートを。<https://tunagaritikyu.wixsite.com/earthlink/about>
- 2) 筆者の多言語活動歴：古典言語ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語を核としたラーニングメソッドを開発。留学時代にパリ大学でフランス語を習得。ドイツ滞在中（ハイデルベルク大学）にドイツ語のほか、フランス・パリ市内にてポリグロット活動により、イタリア語、スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語を手掛ける。
- 3) フェイスブック、ツイッターなどのソーシャルメディアにおいて多言語交流環境を開発しています。<https://www.facebook.com/tunagari/notes/>
- 4) ポリグロットカンファレンス2019福岡
<https://polyglotconference.com/our-history/>